

子どもとの出会い

——始原の回復と時の再生——

……毎朝、すべてが変り、すべてがはじまる。

数かぎりない朝。

明日になれば、真新しいある世界が、さらにもっと驚くべき世界が、べつの太陽、いくつかのべつの太陽といっしよに、べつの空に現れてくる。……

——E・イヨネスコ『発見』より

新しい一日が訪れる。カーテンが開かれ、窓があげられる。パッと室内に散らばる朝の大气、天井や壁に光と影が躍った。と、その瞬間、ベッドの上の子どもの瞳が、急にいきいきと輝き始める。恰も、朝の光の呼びかけに、同じきらめきで答えようとでもするかのよう。

光は、昨日、彼の傍から去っていった。そして、そのあとに訪れた深い闇は、すべてを抱きとり溶かし込んで、彼自身も存在を無化させてときを過ごしている。そしていま、眼前に生まれてき



本 田 和 子

た真新しい光。すべてが変わった。創られたばかりの世界が、次々と立ち現れる。天井にちらちらするあの影、あれは一体、何という生きものなのだろう。子どもたちの眼は、昨日に変わる今日に引きつけられ、そのみずみずしさに驚嘆しつつ、見慣れたものと未知のもの、存在と物体を見分けようとつとめる。時に微笑み、笑い声を挙げ、或いは叫んだり、泣いたりしながら。

そして彼らは、全身で問い続け、考え続ける。始原的な一つの問い、「これは一体、何だろう」と。さらに永続的ないま一つの問い、「わたしは一体、だれなのだろう」と。

私どもがもし、人生の「はじまりのとき」の視線を取り戻したとするならば、世界は何と驚きに満ちたものとなることか。現実はそのとき、全く異なった光を帯び、しかも生まれたばかりのみずみずしきで出現することだろう。

「……世界はぐらりと傾いた。わたしの過去から、わたしの奥

底にある生きるための核心をわたしがつかんだ時。」

と、詩人がうたうように、私どもが、自身の始原神話にたどり着くことができたとしたら、世界はそのたたずまいを、根底から変えて見せるに相異なる。そのとき私どもは、絶えず未知のものに眼を見張り、瞬間ごとに真新しい自我を認識する欲びと怖れで、緊張に満ちたときを生きることであらう。

驚嘆する能力は、人に、日常の次元を超出させる。ものを創る人々の多くが、その創作活動の源泉を自身の「幼年」に求めるのは、このゆえと言えるのではないか。例えばイヨネスコは、「自分はいつもはじめのはじめにもどる」と、口ぐせのようにくり返すのである。

人は、始原のまなざしを失なったとき、日常性のなかに埋没する。私どもの世界が、すべて見慣れたもの、知り尽くされたものだけで覆われるなら、そこは安住の地に似て、実は弛緩と倦怠のはびこる所ともなりやすいのだ。ところで、これら既知の日常も、一たび、「はじまり」の日の視線でとらえ直されるとき、新しい光の下にその聖性をよみがえらせる。そこで私どもは、再び問い直すことを始めるだろう。「これは一体、何だろう」と、そして、「私は一体、だれなのだろう」と。

ありふれた日常が、驚異と奇蹟に満ちた「常ならぬもの」で覆われる、それは、非日常の出現である。私どもの先祖たちは、日常的なこの世界に、「まれびと」の神を迎えることで、非日常の時空間に生きるすべを身につけていた。その時間は、「ハレの日」と呼ばれ、神をもてなす行ないが「祭り」であった。

彼らにとって、新年は、俗なる時間が遮断され、「太初るとき」が新しく生まれたことを祝う「ハレの日」である。時間を循環させることで、彼らは、周期的に始原を回復させ、ときの再生をはかったのである。こうして、時間は、ヒエロファニー的瞬间の介入により、均質恒常な不断の連続ではあり得なくなった。そのゆえに、人は、死へ向かって直進する有限の時間から、逃れ出すすべを見出したのである。

私どもが、自身の始原、「かのはじまりの幼ない日々」の視線をよみがえらせるとしたら、それは、時間の超克と言えないだろうか。「成人したいま」には位置つき得ぬ筈の過ぎ去った「幼年期」、それが現在の中に再生される。そのとき、人は、現実の時の秩序から脱け出し、それをみずから操作する自由を獲得する。時に抗い、時を超えることが可能となるのである。私どもが、みずからの中に「幼年」を再現する、それは、一種のヒエロファニー的瞬间と言うことができよう。

そのゆえでもあろうか、時間の外に生きることを願うとき、自身の「幼年」と出会う人が少なくないのは。マルセル・ブルーストは、マドレーヌケーキの小片を口にしたとき、みずからの中に油然ゆうれんと湧き起こってきた「幼年」に驚歎した。お茶に浸されたケーキの味によつてゆり動かされ溶かされた時間の壁が、彼の中に、三十年前の感覚をそのままにのみがえらせたのである。

幼年の再生とは、単なる過去の追懐ではない。「かつて、あのようなことがあった」と、幼い日々の体験を過去形で回想し、郷愁にふけることは、去つていった者への鎮魂の営みにすぎない。ブルーストに訪れたのは、単にマドレーヌにまつわる「思い出」ではなかった。それは、マドレーヌの味覚によつてはからずも触発された感覚の不死性への感動である。外的な現実と、それにかかわる自我は、時の経過と共に変貌する。にもかかわらず、自身の内部には、時間の破壊力に抗し、時の侵蝕にも耐えて、みずみずしい「あの日」が生き続けていたのだ。

以後、ブルーストのまなざしは、執念深く内に向けられ、「失なわれたかに見えた時」が探索される。「かのはじまりの日」の再生に端を発して、内側に保たれていたすべてが発掘された。それらをとらえ直し、内的な秩序の下に再構成するための情熱的な営み、その果てに、彼は、己れの全生涯をこの世の外に再現し得

たのである。「夕闇の中で昼の光を再生させようとした」と評される彼の営為は、運命的な時間に対する戦いの宣言と見ることも可能であらう。

すべての人にあつた「はじまりの日」は、全生涯を通じて常に内在し、その人と潜在的に歩みを共にしている。それは、現実の時間の推移に左右されず、外界の変化にも超然として変ることがない。しかも、時間の外にあるがゆえに、老いることも死ぬことも知らないのである。

「老いも死も知らない存在」とは、まさにピーターパンに象徴されるような「永遠の子ども」である。一人の人間の核となるべき「かのはじまりのとき」は、内在する「永遠の子ども」である、ということにならうか。

多くの人々が、自身の存在の根を、幼年時代の薄明りの中に求めようと試みる。例えば、フランツ・カフカの発想の源泉は、常に幼少期のドラマにあつた。北杜夫は、その処女作の中で次のように語る。すなわち、「失われていた過去をさぐることは、僕にとって自己の実体についての解明であり、頭の中の一つくりごとではなく、生身に密着した生理的な行事となつていた」と。

ところで、己れの始原は、記憶の光の差し込まない原初の霧の

中に身を潜め、忘却の水底深く沈み込んでいることが多い。「はじまりの日」への接近が、イメージの力を要し、夢想に依ることを必要とする所以である。パシュラールの言を借りるならば、「過去の価値をふたたび甦えらせるには、深い休息という平穏な状態で夢想にふけり、夢想という心的作用の拡大を受け入れなければならぬ」のであり、「そのとき、『記憶』と『想像力』とはわたしたちの生命にかかわるイマージュ群をわたしたちに取り戻すために競いあう」のである。

◆ ◆ ◆
人は、他者の筆になる幼年時代と出会うとき、それを自身のもので感じる傾向を持っているのではないだろうか。例えば、イヨネスコが次のように語るとき、私どもはそれを、みずからの体験のように受けとめる。「乳母車のなかに押しこめられたりすると、あの巨大な塊、樹木などほどの種類に属するのかよくわからなかったし、果してこちらが先方のほうに向って進んでいるのか、それとも先方がこちらにやってきて、わたしを怖がらせて叫び声をあげさせるのか、見当がつかなかった」

そうだ、乳母車の上の私を襲ったあの驚きと恐れ、世界が突然危険な相貌を呈し、私を脅かし始めたあの瞬間、私どもは、いま、ありありとそれらを想い浮かべることができる。確かに、こ

れは、「私自身の体験」なのだ。

もちろん、自然科学的な意味での客観性を重視するならば、このような体験の覚醒は、無価値とみなされるに相違ない。これらは、真実の記憶なのか、それとも他者のことばによって誘発された己れの夢想なのか、いずれとも確かめようがないからである。

然し、私どもが先のイヨネスコの文に触れるとき、自身の幼年期が同じよそおいを持って立ち現われてくるというこの体験、そして、「私もそうだった、そうであつたに違いない」という確信を己れのものとすること、これらもまた、動かし難い真実と言えよう。

とすれば、私どもに内在する「幼年」とは、事実の記憶としてではなく、夢想において存在している、ということになるのかもしれない。

考えてみれば、一人一人の真の始原は、「母の胎」という暗黒の海に眠り込んでいて、現身においては探ね入るすべもない。「幼年」という神話空間とその先には、底知れぬ忘却の淵が、ひそやかに暗い水を波打たせているのだ。詩人驚津繁男の言を借りるなら、そもそも、人間の誕生とは、「冥くらく暖い母の海から、その潮おのづから忘却の河となりゆく流れの中に運ばれて、この世が占める俗なる光の中へ記憶喪失者として現われつつ、ただひた

すらに『現在』なる声を挙げる」ことなのである。

こうして、人間を、根源的な忘却の上に出現した存在とみるなら、始原への遡行が、記憶を媒介としないのもまた、当然と言えないだろうか。

内なる「幼年」が、事実にもまして、より多くを夢想到に依存するがゆえに、それはまた、他者との共有を可能にする。他者によって描き出された幼年期のイメージが、私どもの中にも同質のイメージを喚起するのである。しかも、それらは、己れの存在の深みから湧き起こってきた私自身のもの、まさしく「わが内なる幼年」と感じられるのだ。

夢想するまなざしが「幼年」へと向けられるとき、人は、現実の様々なへだたりを越えて、その感動を共有する。幼年にかかわる夢想には、原型とでも呼べるべき共通のイメージが存在する、ということになるのか。

マドレーヌケーキの薄片を口にしたとき、ブルーストの中に、突然、幼年期の感覚がそのままよみがえって、彼を感動させた。そして、それに導かれるかのように次々と出現する幼年の世界、すなわち、「おやすみ」を告げる母のキス、チリンと鳴る門のベル、花盛りのさんざしのおい、など、それらに、ブルーストの心は激しく震える。

「ところが、菓子細かいかけらのまじった一口のお茶が、口うらにふれた瞬間、私は身顛いした。何か異常なものが身内に生じているのに気づいて。なんとも言えぬ快感が、孤立して、どこからともなく湧き出し、私を浸してしまっているのだ。その快感は、宛も恋のはたらきと同じように、高貴なエッセンスで私を満し、忽ち、私をして人生の有為転変に無関心にし、人生の災厄に平然たらしめ、人生の儂なさを迷妄と悟らしめたのであった。というよりもむしろ、そのエッセンスは私の裡にあるのではなく、私そのものだった。私はもう自分を凡庸にして偶然な、命数に限りあるものとは感じなくなっていた。」以後彼の残された生は、この喜びの源を再現するために捧げられることになる。

私どももまた、これらの文章に触れるとき、同様の感動に心を震わせつつ、彼の「幼年」を共有する。そして、しばしば、その感動に誘い出されて、私自身の「幼年」がよみがえってくるのだ。ブルーストならぬ私どもの場合、お茶に浸したのはマドレーヌケーキではなく、「おやすみ」の挨拶はキスではなかったかもしれない。然し、舌によみがえるのは甘さや、頬に再現される柔らかなやさしいタッチ、そしてそれらに彩られた幼年期のイメージは、同質に違いないのである。それぞれの「幼年」という神秘の井戸は、共通の水底でつながっているのかもしれない。

それゆえに、身近にいる現実の子どもたちとの間でも、夢想の共有が可能である。この共通の水底を通路とするとき、私どもと、「外在する子どもたち」との間に、深部的な交感が成立するのだ。

現実の子どもたちは、みずからのありように関して、多くを語ることをしない。とりわけ、その夢みる手足に感じられる世界の夢想を、言葉で表現するすべを知らないのである。然し、彼らの行動、特に「遊び」と呼ばれる自由な活動は、直截にその内的世界を反映している。子どもたちは、言葉で語るのではなく体で語り、筆で描くのではなく手足で描くのである。

私どもは、先に、他者の語る言葉を聞き、他者の綴る文を読むことによって、その夢想を共有した。同じように、子どもたちが体で描くこの絵図を読むなら、彼らの夢の世界像に近づくことができるのではないか。その結果、私どもは、「子どもの視線」で世界を見ることを始めるだろう。「外なる子ども」の動きに触発されて、内在する己れの「幼年」が目覚めるのだ。

私どもは、外在する子どもへの動きに想いをこらし、或いは彼らとその動きを共にするとき、自身の中にいきいきと脈打っている己れの「幼年」に感動させられることが多い。子どもたちと泥を捏ねるとき、指先には、忽然と、あの日の同じ感覚がよみがえっ

てくる。彼らと手をつないで走るとき、頬を過ぎる大気は、あの時と同様に、快い渦を形成しているではないか。内なる「幼年」はまさしく不滅であり、老いることも死ぬこともない。そして、私という存在の同一性は、この「永遠の子ども」という核の上に形成されているのだ。

このように、子どもたちとの生の共有は、私どもの中に、自身の始原を目覚めさせてくれる。彼らと交わることによって、人は、己れの神話を生き直すのだ。そしてそのとき、私は、みずからの存在の根を確認する機会を持つことができる。

ところで、それは、単なる「私」の範疇に属することであろうか。より深く、より広大な、「人間の魂の基盤」にまで下降しようとする試みではないのか。パシユールは、大いなる夢は、無数の魂によって共有されると言う。「不滅の幼年」への夢想こそ、すべての人々の共有にかかわるものではないか。そのゆえに、私どもは、子どもらの砂の遊びに天地創造のかの月を想い、人と世界の原風景を見るのだ。子どもとの出会いは、生の歩みに位置づく重要な通過儀礼である。それは、恰も、遠く神話時代の英雄たちが、その漂泊の途上、己れの境涯を確かめようと冥府に降り、祖霊の神々に教えを乞おうとしたような、それに類するような意味深い出来事なのである。